

## 『豊饒の海』試論（3）：物語の終焉、そして聡子は「どこ」にいる？

稲田，大貴  
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程

<https://doi.org/10.15017/16400>

---

出版情報：九大日文．13，pp.105-118，2009-03-31．九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 『豊饒の海』試論(3)

——物語の終焉、そして聡子は「よい」にいる。——

INADA DAIKI  
稲田 大貴

## 一 問題の所在

『豊饒の海』<sup>①</sup>第四卷『天人五衰』の結末部、なぜ聡子は再び物語にその姿を現したのだろうか。

筆者は拙稿『豊饒の海』試論(2)——物語られる「転生」をめぐって——(『九大日文』二〇〇八年十月)において、先の論考<sup>②</sup>で提示した物語の内と外という二項対立のゆらぎについての考察を行った。具体的には『春の雪』後半部以降、物語から姿を消した聡子が本多の回想、あるいは会話中にその名が挙げられていることから、姿を現わさないながらもそのように語られる聡子が、本多の物語においていかなる機能を持っているのかという問いを設定し、論を進めた。本多は「法」に拠る人間であり、テクスト中には四有輪転や唯識論が転生を支える法として提示される。しかしそれらの法は、本多が一連の「転生」を転生と認識するための法としては機能していない。前稿では、語られないことで本多の認識下に生み出された聡子の「像」がその「法」の役割を負っていると論じ、これにより物語の外にある聡子があたかも物語内にあるように見えることで、その二

項にゆらぎが生じていると論じた。しかしこれでは冒頭に提示した問いには答えてはいない。その問いに答えるためには『天人五衰』の分析を経る必要があるだろう。

『天人五衰』において本多は七十六歳という老齢に達している。妻の梨枝も既にこの世を去り、本多は老友である慶子と付き合いつつ、余生を送っていた。あるとき、本多は慶子と三保の松原への旅行中、三つの黒子を持った少年、透と出会う。本多は三つの黒子を見、透を転生者ではないかと思ひ、自分の養子にする。初めの内は順調であった二人の生活も透が二十歳になり、その内に秘めた悪意を顕し、本多を虐待するようになったことで一変する。しかし透は、慶子から転生の秘密を聞いたことよって服毒し、自殺を試みる。結果、透は一命を取り留めるが失明し、狂女の絹江以外との誰とも口をきかない生活を送る。絹江はその後、妊娠し、一方で本多は良性腫瘍の脾臓囊腫を患う。本多が聡子の下を訪れることを決意するのは、この後のことである。

本多の認識下に生み出された聡子の「像」が、本多の認識において一連の「転生」を転生たらしめている「法」であることを踏まえれば、『天人五衰』で聡子の存在が本多の物語に要請される理由として、夢と現実の狭間で織り成される転生を見る物語である本多の物語に何らかの変調が起こっていることが考えられる。その変調が大きく振幅し、もはや元の位置にまで戻れなくなっていることの表れが、透の失明、絹江の妊娠であり、本多の病である。このように、本多の物語の変調は『天人五衰』

後半部から顕在化しているが、その変調自体は、透という存在が本多の物語の内部に入り込んだ時点から既に始まっていると思われる。

よつて本稿では透が『天人五衰』においていかなる存在として扱われているかを分析し、その存在によつて本多の物語がどのように変調したのかを考察する。その上で透の失明を始めとした、絹江の妊娠、本多の病といった事象がどのように本多の物語に作用し、聡子の存在を要請させたのかを考えることで、なぜ聡子が物語られなければならなかったのかを明らかにする。以上の論考を踏まえ、テクストという領域において聡子は「どこ」に「いるのか」を考えたい。

## 二 透という存在

『豊饒の海』四部作を概観すると、清顕↓勲↓ジン・ジャンという一連の「転生」に連なる人物として、透は位置づけられる。また『天人五衰』において、透は美しい、才能ある少年として描写されると共に、「選ばれた」者の意識を持った少年として描写されている。その意識を支えているものは、透の認識、つまり「見る」ことである。

彼は凍つたやうに青白い美しい顔をしてゐた。心は冷たく、愛もなく、涙もなかつた。

しかし眺めることの幸福は知つてゐた。天賦の目がそれ

を教へた。(中略)見て見て見抜く明晰さの極限に、何も現はれないことの確実な領域、そこは確実に濃藍で、物象もともどもに、酢酸に涵され酸化鉛のやうに溶解して、もはや見ることが認識の足枷を脱して、それ自体で透明になる領域がきつとある筈だ。

(中略)

この十六歳の少年は自分がまるごとこの世界には属してゐないことを確信してゐた。この世には半身しか属してゐない。あとの半身は、あの幽暗な、濃藍の領域に属してゐた。従つてこの世で自分を規制しようどんな法律も規則もない。ただ自分はこの世の法律に縛られてゐるふりをしてゐれば、それで十分だ。天使を縛る法律がどこの国にあるだらう。(『天人五衰』三章)

この透の「見る」ことによる認識のあり方は本多のそれと全く同質のものである。慶子と共に、三保の松原を訪れた本多は、透の働く帝国信号通信所を訪ねる。ここで本多と透は初めて顔を合わせるようになるが、本多はそのとき、透を一目で見抜く。

本多と少年の目が会つた。そのとき本多は少年の裡に、自分と全く同じ機構の歯車が、同じ冷ややかな微動を以て、正確無比に同じ速度で廻つてゐるのを直感した。どんな小さな部品にいたるまで本多と相似形で、雲一つない虚空へ向つて放たれたやうに、その機構の完全な目的の欠如まで

同じであつた。(中略)……しかし少年が同じ機構を持ちながら、本多とはちがつて、それを完全に誤解してゐることはありうることだつた。多分それが年齢といふものだらう。本多の工場は人間の完全な欠如によつて人間的だつたが、少年がどうしてもそれを人間的と考へないのならそれでもよかつた。(『天人五衰』十章)

ここで語られる「機構」とは認識者としてのそれである。本多がそれを「人間の完全な欠如によつて人間的」な機構として捉えているのに対し、透は「人間的契機」から免れた、「選ばれた」者の機構として捉えているという差異はあるが、透は本多と相似形の認識者として語られる。

しかし先に述べたように、透は『天人五衰』における「転生」者としても扱われる。その最も大きな証跡は透の脇腹に見られる三つの黒子である。四有輪転による年齢の一致に関しては、ジン・ジャンの死亡日が「春」とのみ語られ、本多の調査でも不明なままで曖昧なこと、また透の誕生日も出生日より後と述べられており、正確でないことから証拠としては取り上げづらい。また夢日記の記述も、透に関するものは提示されておらず、本多は疑いを持ちながらも、三つの黒子だけで透を転生者と見做している。透が清顕に連なる転生者であるか否かは、先に述べたように、転生を決定づける普遍的法が不在である以上は決定不可能である。しかし決定不可能ではあるものの、転生者か否か、という疑問の対象となるには転生者らしい条件を有してい

る必要がある。転生の証拠として三つの黒子の他に、透がこれまでの「転生」者の過去世を見てみると読まれる箇所がある。

この山脈の上にはところどころに仄青い間隙のある薔薇いろの横雲が一面に流れ、この山脈の下には薄鼠いろの雲が海のやうに堆積してゐる。そして山脈の浮彫は、薔薇いろの雲の反映を山裾にまで受けて、匂うてゐる。その山裾には人家の点在まで想ひ見られ、そこに薔薇いろに花ひらいた幻の国土の出現を透は見た。

あそこから自分は来たのだ、と透は思つた。幻の国土から。夜明けの空がたまたま垣間見せるあの国から。(『天人五衰』五章)

そのとき透の望遠鏡は、見るべからざるものを見た。

顎をひらいて苦しむ波の大きな口腔の裡に、ふと別の世界が揺曳したやうな気がしたのである。透の目が幻影を見る筈はないから、見たものは実在でなければならぬ。(中略)暗い奥処にひらめいた光彩が、別な世界を開顕したのだが、たしかに一度見た場所だといふおぼえがあるのは、測り知られぬほど遠い記憶と関わりがあるのかもしれない。過去世といふものがあれば、それかもしれない。(中略)が、そこに光明があり、閃光が走つたのは、稲妻に貫かれた海中の光景だつたのだらうか。そんなものが、このおたやかな西日の汀に見られやう筈はない。第一、その世界と

この世界が共存してゐなければならぬといふ法はない。そこに仄見えたのは、別の時間なのであらうか。今透の腕時計が刻んでゐるものとは、別の時間の下にある何かなのであらうか。(『天人五衰』十三章)

何の鳥だつたらう。あまり永く見詰めてゐるうちに、その黒い羽根の固まりは、鳥ではなくて、女の鬢のやうにも思はれた。 (『天人五衰』二十四章)

これらは對馬勝淑<sup>(3)</sup>、太田雅子<sup>(4)</sup>らが既に指摘しているように、透が過去世の記憶として、ジン・ジャン、勲、清頭<sup>(5)</sup>の記憶を見ていると読むことができる。このように透は語り手のレベルから見た場合は「転生」者として扱われている。しかし、一番目、二番目の引用は透に内的焦点化した描写であり、三番目は透の手記として記されたもので、いずれも本多に示されることはない。つまり、この透の見た過去世の記憶は本多に軸をおいて考えた場合、存在しないものであり、語り手のレベルから考えた場合のみ、透が転生であるという証拠となつてゐる。

ここで三つの黒子について考え直しておきたい。本多は透に三つの黒子を見、疑問を持ちながらも転生であると認めた。しかしそれが本多、つまりは認識者<sup>(6)</sup>にのみ見ることのできる、自身の参入できない「不可能」の表徴である可能性を前稿で提示した<sup>(7)</sup>。本多にとつては、自身の参入の「不可能」と転生の証拠とはほぼ同義である。しかし透もまた、自身の三つの黒子を

確認している。先の論文でも述べたように、『豊饒の海』全体を見渡しても、三つの黒子を見たことが言明されているのは本多と透のみである<sup>(8)</sup>。

さうして上げた自分の腕を、窓の光りが蒼々と沁り下りて来て、石鹼の泡に見えがくれしてゐる脇腹の、左の乳のすぐかたはらを明るませてゐるのを、透はちらと見て微笑した。生まれながらに、そこに、三つの黒子が昴の星のやうに象嵌されてゐる。いつからともなく、透はそれを自分があらゆる人間的契機から自由な恩寵を受けてゐることの、肉体的な証しだと考へてゐたのである。(『天人五衰』第六章)

透は三つの黒子を「人間的契機から自由な恩寵を受けてゐること」の証し、つまり透徹した認識者として「選ばれた」者の肉体的表徴として受け取つてゐる。しかしそうではない。三つの黒子を見ることができると、それが認識者たる証しではないだろうか。見るといふ行為には、必然的に「距離」が必要である。よつて見ながら参入することは不可能である。しかし透は自身に三つの黒子を見ている。つまり透は「転生」者でありながら、認識者でもある、矛盾した存在と言へる。このことは本多によつて、「知つていながらなおかつ美しい」存在として語られる。しかし本多はそれを「ありえない」と考え、透を転生者の「精巧な贗物」ではないかと疑つてゐる。けれどもここで

は、透が「転生」者でありながら、同時に認識者でもあるという矛盾を内包している存在として語られているという理解に留めておきたい。

### 三 透の手記

透が「転生」者であると考えた場合、その「転生」者としての運命というものが問題となる。慶子は透を呼び出し、転生の秘密を語った際、次のように述べている。

「そこから喜んで出て来たのは、そもそもあなたが、自分は人とはちがふと思つてゐたからでせう。

松枝清頭は、思ひもかけなかつた恋の感情につかまれ、飯沼勲は使命に、ジン・ジャンは肉につかまれてゐました。あなたは一体、何につかまれてゐたの？ 自分は人とはちがふといふ、何の根拠もない認識だけにでせう？

外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻すものが運命だとすれば、清頭さんも勲さんも、ジン・ジャンも運命を持つてゐたわ。では、あなたを外からつかんだものは何？ それは私たちだつたのよ」（『天人五衰』第二十七章）

「転生」者は運命につかまれ、それによつて行為へと導かれる。清頭は恋の感情につかまれ、月修寺に入り、会うことが不可能となつた聡子に死を賭して会いに行き、勲は不可能の表徴とし

ての天皇に対しての忠誠につかまれ、蔵原武介を暗殺し、切腹する。ジン・ジャンもまた、自身の肉体という不可能につかまれ、レスビアン行為を行う。では透は一体、何につかまれて、行為しているのか。ここで、透のある性質を提示しておきたい。

透の心にたえず疼くやうになつた或る衝動も亦、絹江の存在に安らぎを覚えてゐる。それはたえずひそかに人を傷つけずにはやまぬといふ衝動である。透の心の鋭利が、もはや囊を突き出た錐のやうに、人を傷つけたくてうずうずしてゐた。一度古沢で味をしめたからには、次に誰を傷つけることができるかと目を周囲に放つた。錯ひとつつげずに磨かれぬいた純粹さは早晚兇器に転身するものだ。透ははじめて、見ることを以外にも、自分に具はつてゐる力のあることに目ざめた。（『天人五衰』二十章）

透は「人を傷つけずにはやまぬといふ衝動」を持つてゐる。それはまさしく悪意と言ひ換えてもよいものであり、透の意識を越えた「やまぬといふ衝動」である。これこそ、透が「つかまれてゐた」、透の運命ではないだろうか。透は自らの悪意に基づいて行為する。その表れが、『天人五衰』二十四章の透の手記であり、二十六章以降の本多への虐待である。「転生」者であるということは、何かしらの運命をもつており、それに基ついて行為する行為者である。このことから透は行為者でありな

から、認識者でもある矛盾存在と言える。

ではそのような透の存在は本多の物語にどのような変調を与えたのか。このことを透の手記を手がかりとして見てゆきたい。透の手記は本多と浜中一家との下田への旅行以後から、百子との破談までが透の一人称によって記されている。なぜこの箇所において手記という体裁をとる必要があるのだろうか。また、手記であるということではいかなる読みが可能になるのだろうか。これらの問いに答えつつ、透の手記に表れている透の性質が本多の物語に与えた変調の端緒をここでは示しておきたい。

透の手記を概観すると、透の内面描写と百子、汀との出来事世を見る箇所と、本多への悪意を吐露する箇所である。例外を除けば全体として、透の手記は透の内面の悪意が百子に対して向けられ、それが現実になつてゆく過程を書いたものであると言える。

百子の美しさは、もちろん客観的条件を充たすに十分でなければならぬ。一方、僕にとつて必要なのは彼女の愛であり、彼女自身を傷つけるための刃物をまづ彼女に与へてやらなくてはならない。にせもの紙のナイフでは、彼女はどのみち自分の胸を刺すことはできない。

多くの「ねばならぬ」の厳しい欲求が、理性や意志からよりも、性慾から出がちなことを、僕はよく知つてゐる。性慾の口やかましい詳細な注文は、しばしば倫理的欲求と

さへまちがへられる。僕が百子に対してめぐらす計画が、かういふ混淆を来さないためには、いつか性慾用の女を別を持つ必要があるだらう。それといふのも、百子の肉体を傷つけないで精神だけ傷つけようとするのが、悪のものとも微妙な悩ましい願ひだからだ。僕は僕の悪の性格をよく知つてゐる。(『天人五衰』二十四章)

このように透の百子に対する悪意の計画が立案され、それは着実に実行されてゆく。その結果として、百子とは破談となる。つまり透の手記には、透の悪意という自意識が現実に発現されてゆく様が描かれている。これは透が行為者であると同時に、認識者でもあることが示されたものである。しかしなぜ、手記という体裁をとる必要性があつたのか。確かに、手記という体裁は百子との破談が透の自意識の現実的発現であることを示す手段としては適切なもののように思われる。しかしここにこそ、この箇所が手記で書かれなければならない理由がある。手記に描かれる透は、間違いなく透でありながら、手記を書いている透自身ではない。手記の内部の透はあくまでも透自身の反映としての「像」である。行為者であり、認識者でもあるという矛盾を抱える以上、透の自意識の発現は行為者である手記内部の「像」としての透と、手記を書いている透自身という認識者に分割可能な手記という形でしか書かれ得ない。しかし透の手記は透自身の手によって海に捨てられ、その後、透による本多への虐待が始まる。このとき透は手記を必要としなくなつてゐる。

手記を書くことで、認識者としての自己によって編まれた悪意という自意識を現実が発現する方法としての「手記」は、既に透に内面化されているのである。

さて、では透のこのような性質は、本多の物語にいかなる変調をもたらしただろうか。本多の物語とは夢と現実の狭間で織り成される転生を見るものである。転生を認識するということは、本多の自意識の発現と言い換えてもよい。そしてそれは夢が現実となり、現実が夢に回収されるという形で編まれてきた物語である。その動力となつている夢日記は清頭の夢の描写だが、本多の自意識はそれを認識の力によって現実に発現させている。しかしその現実是一方で夢に回収されており、本多の物語は夢／現実の二項対立の狭間で紡がれている。しかし透に關しての夢日記の記述は一切、提示されていない。また夢日記と透の手記を比較してみても、夢日記が清頭の夢の描写を本多の自意識が現実に発現したものであるのに対し、透の手記はあくまでも透の自意識が現実に発現したものに過ぎず、あくまでも現実の領域に限定されたものである。このことは透が毒を嚙んだ後に本多の、夢日記を「どうして焼いたか、といふ問」に「僕は夢を見たことがなかつたからです」と答えていることにも表れている。これらのことから透は本多の物語において、完全に現実のみにある存在と言える。

この透が三つの黒子を持つていたことで、本多は一連の「転生」者との連続性を透に見、透は本多の物語に組み込まれる。このように夢／現実の二項対立によって構成された物語の内部

に透という、現実のみ抱擁している存在が入り込むことで、その構造は少しずつ崩壊へと近づいてゆくことになるのである。

#### 四 物語の終焉

透が失明し、自身に良性腫瘍の脾臓嚢腫が見つかった後、本多は月修寺を訪れ、聡子に会う決意をする。しかしその理由は明確に示されていない。六十年の間、訪れることのなかった月修寺をなぜ本多は訪れなければならなかったのか。換言すれば、なぜ本多の物語にこれまで語られなかった聡子が招請され、語られることが可能となったのか。その直接的な契機として語られているのは、本多自身の病である。しかし、それはあくまでもぎっかけに過ぎない。本多の物語に聡子が要請されなければならぬ理由は、透の存在によって本多の物語を構成している夢／現実の二項対立が崩壊へと近づいていつているからである。本節ではその過程を、『天人五衰』の二十六章以降から見 てゆきたい。

本多は疑いを持ちながらも、透をその三つの黒子によって転生者であると認識した。このことは透が、本多の自意識の発現としての本多の物語に組み込まれたことを意味する。しかし透は、逆に本多を自意識の発現に組み込もうとする。それは透の悪意が本多に向けられることで顕在化し、本多と透の、認識による闘争がここに繰り広げられるのである。『天人五衰』二十六章からは、その透の悪意の顕れが語られる。本多は透の虐待

によつて、理性の澄明さを失いながらも、透が満二十一歳までに死ぬという「希望」を持つていた。しかし結論を言つてしまえば、この認識の闘争は決着しなかつた。慶子が透に転生について話したからである。慶子の話を聞いた透は、本多に夢日記を借りる。その後透は、夢日記を燃やして服毒し、失明する。なぜ透は毒を嚙んだのか。それは透の家庭教師であつた古沢が語つた鼠と猫の話に端的に表されている。

「ぢや、話さう。……」

たとへば自分を猫だと信じた鼠の話だ。なぜだかしらないが、その鼠は自分の本質をよく点検してみても、自分は猫にちがひないと確信するやうになつたんだ。そこで同類の鼠を見る目もちがつて来、あらゆる鼠は自分の餌にすぎないのだが、ただ猫であることを見破られないために、自分は鼠を喰はずにゐるだけだと信じた」

(中略)

「ところがある日のこと、その鼠が本物の猫に出会してしまつたんだ。

『お前を喰べるよ』

と猫が言つた。

『いや、私を喰べることはできない』

と鼠は答へた。

『なぜ』

『だつて猫が猫を喰へることはできないでせう。それは原

理的本能的に不可能でせう。それといふのも、私はかう見えても猫なんだから』

それをきくと猫は引つくり返つて笑つた。髭をふるはせて、前肢で宙を引つ掻いて、白い柔毛に包まれた腹を波打たせて笑つた。それから起き上ると、矢庭に鼠につかみかかつて喰はうとした。鼠は叫んだ。

『なぜ私を喰はうとする』

『お前は鼠だからだ』

『いや、私は猫だ。猫は猫を喰ふことはできない』

『いや、お前は鼠だ』

『私は猫だ』

『そんならそれを証明してみろ』

鼠はかたはらに白い洗剤の泡を湧き立たせてゐる洗濯物の鹽の中へ、いきなり身を投げて自殺を遂げた。猫は一寸前肢を浸して舐めてみたが、洗剤の味は最低だつたから、泛んだ鼠の屍はそのまゝにして立ち去つた。猫の立ち去つた理由は分かつてゐる。要するに、喰へたものぢやなかつたからだ。(後略)『天人五衰』第十八章

この話を透の場合に当てはめてみると、自身を「人間的契機」から免れた「選ばれた」存在と見ている透が、自身を猫と信じている鼠である。そして本物の猫は、慶子によつて突きつけられた転生者たちの存在であり、それを「予言」した夢日記である。透は自身が「選ばれた」存在ではないことを慶子の言葉を

介して突きつけられる。それによつて透は自身が「選ばれた」存在であることを証明する必要に迫られ、本多に夢日記を借りるのである。夢日記には透の見た過去世が書かれていた可能性もある。しかしそれが提示されていない以上は憶測に過ぎない。どちらにしても、透は夢を見たことのない自身が「選ばれた」存在ではないことを突きつけてくる夢日記を焼く。それによつて透を「選ばれて」いないと証明するものはなくなった。しかも、二十歳で死なない自分自身が残っている。透は自身が「人間の契機」から免れた「選ばれた」存在であることを「自己正当化」するには自殺するしかない。つまり透は自身が独りだと信じていたが故に、服毒し、自殺を試みたのである。しかしそれは「失敗」し、透は死なず、失明という結果をもたらした。ここで一つの問題が浮上する。果たして透が服毒しながらも、死ななかつたことは「失敗」だったのだろうか。

「大の五衰」の相はどうかといふのに、その一は淨らかだつた衣服が垢にまみれ、その二は、頭上の華がかつては盛りであつたのが今は萎み、その三は、両腋窩から汗が流れ、その四は身体がいまはしい臭気を放ち、その五は本座に安住することを樂しまない。(『天人五衰』八章)

これは天人に表れる「大の五衰」の説明である。物語のレベルにおいては、失明後の透の様にはこの「大の五衰」を読み取ることが出来る。また透の失明は認識の喪失と同義であり、透の

抱えていた、認識者でありながら、転生者でもあるという矛盾は解消されている。その意味において、透を転生者であると読むことも可能であり、転生者であることを証明したという点において「成功」とも言える。しかし本多は透が二十一歳になつても生き延びているのを見届けることで、透を贖物と断定している。なぜか。本多の物語は二つのものによつて支えられている。本多自身と本多の認識によつて生み出された聡子の「像」である。それが存在する以上、夢と現実の狭間で織り成される転生を見る物語は終わらない。この前提から見れば、二十歳で死ななかつた透は贖物となつてしまふのである。しかし、もはや本多の認識を越え、物語は終焉へと近づいている。物語の動力となつていた夢日記は透の手によつて燃やされ、透は「大の五衰」を表している。そして、まるで死にゆく物語に引きずられるように、本多は良性腫瘍の脾臓囊腫を患う。また遺伝性の狂疾を持つ絹江は透の子を妊娠し、本多、透が持つていた理性の澄明さはその子には決して受け継がれず、紡ぎ手のいないことの確実な物語はもはや死を避け得ない。こうして本多の物語は終焉へと近づいてゆく。本多がそれを守るためには、物語の「法」たる聡子に会わねばならないのである。しかし語られない聡子のいる領域は決して物語られない。なぜ本多は聡子に会うことが可能となつたのか。それは物語を支えていた夢／現実の二項対立はすでに崩れ去る寸前であり、物語られない聡子との間の境界も弱体化しているからである。こうして聡子は六十年の時を経て、再びテクストに現れるのである。

## 五 聡子は「どい」にゐる。

夢日記は焼失し、転生者もはや現実存在に墮ち、死を待つのみとなった。夢／現実の二項対立によつて織り成されてきた転生の物語は、今にも崩壊する寸前である。そしてそれを見続けてきた本多の身体も老い、患つてゐる。死にゆく物語の最期の足掻きに付き合わされるかのように、本多は月修寺を目指す。

山門までの昇りの参道は遠く、車は山門まで入れるのに、老人の歩行は無理だと、運転手は、雲がのこりなく晴れて、日がいよいよ激しくなつた空を見上げて、執拗に本多に勧めたが、本多はしたたかに断つて、この門前で待つてゐるやうに命じた。どうしても六十年前の清頭の辛苦を、わが身に味ははねばならぬと思つてゐたのである。（『天人五衰』三十章）

又立上る本多には、果して山門まで行き着く力があるかと疑はれた。歩きながら、目はゆくての木蔭ばかりを数へてゐるのである。この暑熱、この登攀の息苦しさ。このさき幾つ木蔭を越えられるか、自らに試しながら歩いてゆく。（『天人五衰』三十章）

M・ユルスナールは『豊饒の海』というテキスト全体に、「登頂のモティーフ」が鏝められているのを見出ししている<sup>⑧</sup>。ユル

スナールが「登頂のモティーフ」として指摘している箇所は全て本多の行動であり、『春の雪』では清頭の代理として月修寺を訪れた場面、『奔馬』では裁判所の塔に登る場面と、三輪山への登山、『暁の寺』では指摘しておらず、『天人五衰』では帝国信号通信所を訪ねた場面、そして最後の登頂が結末部における月修寺までの歩みである。これら「登頂のモティーフ」を概観すると、本多の物語を支える要素がその頂に用意されているという共通項が浮かび上がってくる。本多が清頭の代理として訪れた月修寺では前門跡による絶対的な否定によつて、清頭にとつて聡子は絶対不可能の存在となり、夢と現実の狭間で織り成される転生の物語が始まるのである。そして『奔馬』での裁判所の塔で本多は手摺に「堆い埃」の積もつた階段を上り、大阪の街を「鳥瞰的な目」で見、自らが「論理的な高み」に居ることを思う。これは本多の物語を支える本多の認識の隠喩であろう。以上二つの「登頂」は本多の物語の始まりと、その物語を支える本多の認識を示している。また『奔馬』での三輪山への登山と『天人五衰』での帝国信号通信所への訪問は言うまでもなく「転生」者との出会いの場である。このことを踏まえて、『暁の寺』を見てみると、ユルスナールは指摘していないが、ジン・ジャンとの出会いは蕃薇宮の二階であり、これもまた「登頂」と言える。そして本多は最後の登頂を行う。本多自身は氣付いていないが、本多の物語の中核を成す転生を支えてきたのは語られないことによつて「像」化した聡子であり、月修寺の内奥に居る聡子ではない。しかしそれを同一と見ている本多は、

自らの物語（あるいは、ここでは世界と言った方がよいかもしれない）を守るために月修寺への登頂を決意する。しかし本多の目指す聡子は物語られない領域にあり、本多にとって辿り着くのが困難な高みにいる。本多の物語は未だ死んではないのである。その意味において、決して語られない聡子への道のりは険しい。しかし本多は苦しみながらも物語の領域と物語られない領域の境目である月修寺へと辿り着き、聡子と面会するのである。

先に述べたように、聡子が清頭を知らないと言ったのは、彼女が『春の雪』後半部以降、本多の物語を主軸とする物語世界から断絶し、その内部にないことによる<sup>9)</sup>。しかしその聡子による清頭の否定は、本多の物語を内側から崩壊させるものである。聡子は物語の外にありながら、物語を内側から崩壊させたのである。一体、聡子は「どこ」にいるのだろうか。

これまでの論考から、聡子という存在は次の四つのレベルにおいて存在していた。

- ①—『春の雪』における清頭、本多の認識による聡子
- ②—『春の雪』における聡子自身
- ③—『奔馬』以降、本多の認識の内に生じた聡子の「像」
- ④—物語られない空白の領域にいる聡子

＝ ④—月修寺の内奥にいる聡子

聡子が清頭を知らないと言ったことが矛盾となるのは、①、②、③の聡子と、④の聡子が全くの同一であると思ってしまうことが原因である。本多もまた、それと同じ誤解をしている。

この誤解によつて、④の聡子による清頭の否定は、そのまま①、②の聡子が否定していることと同じと見做され、矛盾を生む。

その矛盾を解消するには、「清頭はいなかった」という結論に行かざるをえないのである。これらのことを踏まえると、聡子は『豊饒の海』というテクスト領域の内部にすることは疑いない。しかしその主軸たる本多の物語から見た場合、聡子はその外部にいます。そして聡子自身が、本多の物語内にあるかつて本多が認識した聡子と、それから生み出された聡子の虚像という、全てのレベルにおける聡子が同一視されることで、聡子自身があたかも本多の物語の内部にいるかのように見えるのである。本多の物語はこのようにして、聡子の言葉によつて内側から崩壊し、終焉を迎える。そうして『豊饒の海』というテクストはそれと同時に、閉じられるのである。

## 六 結論

これまで本論では、本稿を含め、三回にわたり『豊饒の海』について論じてきた。『天人五衰』結末部における、清頭を知らないという聡子の言葉に着目し、論考を進めてきたが、この点に関して多くの先行研究では、その矛盾を解消しようとする解釈が行われてきた。それに対し、本論では聡子の言葉が矛盾していることを認めた上で、その言葉がなぜ矛盾と理解されるのか、というテクストの形式を問題としてきた。

『天人五衰』結末部における聡子の言葉が矛盾と理解される

ことについて、本論では本多の物語を主軸とする物語られる領域に対して、聡子のいる物語られない領域という対立項を立て、そのゆらぎによって聡子の言葉が矛盾と捉えられると説明した。つまり『豊饒の海』というテクストの構造として、物語られる領域の外部に物語られない領域を見出したわけだが、この点に関して柴田勝二は、小林康夫論<sup>10)</sup>に対しての反論という形で異議を唱えている。

この異質性について小林康夫は終結部における聡子の言葉を作品の外側から投げ込まれた力として見なしている。小林はこの場面における聡子の発言によって、これまで維持されてきた物語性が解体させられるという見方を示しているが、その根拠として「決定的な一撃が、『外』から、月修寺という物語のなかの『外部』、そのクリプトから——いや、そのさらに『外』でもあるその庭、いかなる記憶も出来事も不可能であるようなその庭から——もたらされる」ことが挙げられている。けれども聡子も月修寺も明らかに『天人五衰』の虚構の構成要素であり、それらが物語の「外部」に属するとはいえない。聡子の言葉によって本多の内で転生の夢が廃棄させられるとしても、それは主人公が幻滅に至る物語としての一つの有機的な像を結ぶのである。(柴田勝二「憑依の脱落——『天人五衰』の終り」、『三島由紀夫——魅せられる精神』二〇〇一年十一月 おうふう)

柴田は作品という語と物語という語を同義と見做し、小林論に対して反論している。ここから柴田が、小林の言う「外部」をテクスト外のことと読んでいることが分かる。しかし小林の「物語のなかの『外部』」という表現は聡子、あるいは月修寺をテクスト内部に位置づけているように読まれ、柴田の見解は小林論を誤読しているように思われる。小林論が聡子、あるいは月修寺をテクスト内部に位置づけていることは、柴田が引用した箇所後の、「とすれば、このレシは、結局は、その展開を通じてみずからの解体へと到達する不可能のレシということになるだろう」という箇所からも明らかである。そしてこれは柴田の言う「主人公が幻滅に至る物語」とほぼ同義である。つまり二氏の意見は聡子の位置に関しての相違はあるが、聡子の言葉によって本多の物語が「不可能のレシ」、「幻滅に至る物語」へと変容する、という点において同意見である。この意見に関しては異論を差し挟む余地はないが、聡子の言葉がどこから発せられているか、という点に関しては未だ検討の余地がある。この問題はすなわち、テクストの構造を問うことと同義であり、二氏の論に本論を対置させることで、本論の結論を導きたい。

柴田は『豊饒の海』を一元的物語と捉え、聡子をその内部に位置づけている。しかしその立場を保持する限り、清顕を知らないという聡子の言葉が矛盾を孕むことは避けられず、それに対する解釈が要求される。柴田は聡子と清顕の恋愛を「情念の憑依に使喚された結果」であると、長い月日と共にその情念が離れたと論じるが、清顕の存在そのものを知らないとする聡

子の言葉の理由としては説得力に乏しい。一方の小林論も『豊饒の海』を二元的物語と捉えているが、その内部に《外部》を仮定し、そこに聡子を位置づけている点で柴田論とは異なる。

確かに『豊饒の海』を二元的物語と見る立場から聡子、あるいは月修寺を『豊饒の海』の構成要素としてその内部に認めつつ、語られないという意味において、物語内部の不可能の領域としての《外部》に見出すことは理解できる。しかし『豊饒の海』を二元的物語と見ることには、やはり疑問が残る。聡子という存在をその視点から見る限りにおいて、聡子は『春の雪』から『天人五衰』に至るまで連続性を有していなければならず、その結果、結末部の清顕を知らないという言葉に矛盾が生じる。

小林はこの点に関して「門跡は、物語の世界にたしかに登場しているのだが、しかし同時にそこから引き籠もり、もはやそこには所属せず、そうであることによつて、その物語世界から一切の基盤、リアリティーそして意味を剥奪してしまう」と述べ、聡子が物語世界から断絶していることを示唆している。この前提からは『豊饒の海』を二元的物語と捉え、その内部の《外部》とすることはできない。聡子という存在に断絶があるとすれば、それは物語から切り離されていなければならないからである。

これに対して本論は『豊饒の海』をテキストとして捉え、その内部に本多の物語を主軸とした物語られる領域と聡子のいる物語られない領域という糸を見出し、『豊饒の海』をそれらが編み合わされた構造を持ったテキストであると論じた。『豊饒の海』を二元的物語と見るのではなく、物語られる領域と物語

られない領域という二項対立によつて形成されているテキストと捉えたわけだが、その二項はゆらぎを孕んでいる。そのゆらぎこそがおそらく『豊饒の海』を二元的物語と捉えさせる原因である。聡子は物語られない領域にありながら、物語られる領域に現れる。しかしそれは物語られない領域にあるが故に現出する聡子の「像」に過ぎない。つまり『春の雪』後半部以降の聡子自身は物語られる領域からは完全に断絶しており、その内部にあるとは言えないのである。

物語られない領域は物語られる領域を、その「法」として支えている。しかしそれは物語られない領域の優位を意味しない。物語られない領域は物語られる領域からしか見出せないからである。その意味においては、小林が「物語のなかの《外部》」に聡子を位置づけたのは正しい。しかし物語られる領域もまた、物語られない領域なしに存在しえない。「物語のなかの《外部》」というとき、その《外部》とは既にある物語の中に見出される外部であり、物語られる領域は物語られない領域なしに物語たりえない以上、その内部としての外部ということではできない。物語られる領域と物語られない領域は同時に始まり、同時に終わる他はないのである。物語られない領域は物語られる領域によつて隠されながらも、取り除けばそのテキストは体をなすことができなくなる。物語られない領域はいわば織物の隠し糸のように物語られる領域の裏側にあつて、その織物（テキスト）を構成している糸である。『豊饒の海』というテキストは、そのような二本の糸によつて編まれたテキストであるとと言える。

【注記】

- 1 初出は第一卷『春の雪』、「新潮」一九六五年九月号—一九六七年一月号。第二卷『奔馬』、「新潮」一九六七年二月号—一九六八年八月号。第三卷『暁の寺』、「新潮」一九六八年九月号—一九七〇年四月号。第四卷『天人五衰』、「新潮」一九七〇年七月号—一九七一年一月号。
- 2 拙稿『豊饒の海』試論(一)——聡子の言葉 『天人五衰』から『春の雪』へ——(『九大日文』二〇〇八年三月)
- 3 對馬勝淑(天人五衰)◎悲劇の演出——安永透の信憑性をめぐって——(『豊饒の海』論 一九八八年一月 海風社)
- 4 太田雅子『豊饒の海』論——転生へ展げる読解の可能性——(『相山国文学』一九九五年三月)
- 5 前掲『豊饒の海』試論(2)——物語られる転生をめぐって——
- 6 前掲『豊饒の海』試論(2)——物語られる転生をめぐって——  
『奔馬』において「……しかし脇腹の黒子に刑吏が指を触れて、それをちらとつまんだ時、勲は決して屈辱から自殺ができるものではないといふ想ひを新たにした。」と語られている。この描写は勲が自身の三つの黒子を確認しているように読まれる。確かに語り手が勲に内的焦点化し、彼の主観に基づいて語っている以上、勲が三つの黒子を認識している可能性は極めて高い。しかしそれが果たして左の脇腹の三つの黒子であったかは定かではなく、またその認識が自身で見たことに基づいているかも分からない。これらの可能性を残す以上、勲が自身の左の脇腹の三つの黒子を見たことが言明されていなければ、それを勲自身が見たかどうかは決定できない。

7 太田雅子は『豊饒の海』論——転生へ展げる読解の可能性——」にお

いて、透が「つかまれてゐた」ものに関して、「百子との交際は、透にあって、本多の教育を総合的に發揮する場であり、その本多から課せられた「習慣」(もうこの頃には「習慣」以上のもの、「性質」になっていたとも考えられる)は、透の持ち前の認識欲の上に成り立ち、猛威をふるうものだった。(中略)そして、正に透は、この「習慣」にこそ(つかまれていた)のだ。」と論じている。しかしこの「習慣」は本多が、透に「運命につかまれ」ないために教えたものであり、それを考えればこの「習慣」とは、透が「転生」者として「つかまれた」運命というよりむしろ、認識者の性質であるように思われる。

8 M・ユルスナール『三島由紀夫あるいは空虚のヴィジョン』(濳澤龍彦訳 一九九五年十二月 河出書房新社) ユルスナールは本論において「登頂のモティーフ」を指摘しているが、それらにいかなる意味があるか、あるいはどのような機能を有しているかという点には言及していない。

9 前掲『豊饒の海』試論(1)——聡子の言葉 『天人五衰』から『春の雪』へ——

10 小林康夫「歴史と無の円環——三島由紀夫『豊饒の海』」(『出来事としての文学』一九九五年四月 作品社)

※ 本文引用は全て『決定版 三島由紀夫全集13』、『決定版 三島由紀夫全集14』(二〇〇一年十二月、二〇〇二年一月 新潮社)に拠る。なおルビ、傍点は省略した。

【付記】

本稿は九州大学大学院において提出した修士論文の第三章、並びに結論を改稿したものである。

(九州大学大学院比較社会文化学府修士二年)